

平成26～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～山梨県教育委員会～

目的 生徒の英語によるコミュニケーション能力向上のための英語担当教員の英語力及び指導力の向上

取組の内容

- CAN-DO形式による到達目標の活用
- 目標・指導・評価の一体化した単元設計の研究
- 生徒のコミュニケーション能力の評価方法の研究
- 英語教育推進リーダー中央研修終了者による研修会の実施
 - ・英語教育推進リーダー伝達研修の実施(悉皆:H28～H30)
- 外部講師による講演会の実施
 - ・各県立高校1名以上で組織する英語研究委員会(年5回)にて、講演会や意見情報交換等の実施
- 教員に求められる英語力の育成
 - ・英検1級・準1級の受検奨励及び受検希望者への受験料助成(中高)

今後の課題と方向性

- 目標・指導・評価の一体化の推進
 - ・CAN-DOリストを基に単元目標を設定と生徒との共有化
 - ・目標達成を適切に見取る評価方法(ルーブリックなど)の質の向上
 - ・生徒に求められる英語力を適切に判断するための言語活動や評価方法の研究
- 教員に求められる英語力の向上
 - ・英語教育推進リーダーによる公開授業や研修会の実施
- 小・中・高等学校連携の推進
 - ・実践校による事例の発表や共有化
- 英語教育に関する今後の課題への対応
 - ・小学校における英語教育の実際や外部英語検定試験の活用方法, 新学習指導要領に基づいた授業実践などについての外部講師等による研修会の実施

成果

【高等学校】

◎教員に求められる英語力の資格取得割合が増加するにともない、生徒に求められる英語力の資格取得割合が増加した。

○CEFR B2レベル(英検準1級)相当以上を取得している教員の割合

	H25	H26	H27	H28	H29
山梨	52.9	54.5	63.6	72.1	71.4
全国	52.7	55.4	57.3	62.6	65.4

○CEFR A2レベル(英検準2級)相当以上を取得している及び相当の英語力を有すると思われる生徒の割合

	H25	H26	H27	H28	H29
山梨	29.8	35.7	29.4	37.6	38.7
全国	31.0	31.9	34.3	36.4	39.3

【中学校】

◎学習到達目標の設定状況割合が増加するにともない、英語担当教員の英語使用状況割合が増加した。

○「CAN-DOリスト形式」の学習到達目標の設定状況

	H25	H26	H27	H28	H29
山梨	16.0	15.3	23.5	62.5	76.3
全国	11.6	31.2	51.1	75.2	85.9

○授業における英語担当教員の英語使用状況(発話の半分以上を英語で行っている割合[山梨])

	H25	H26	H27	H28	H29
中1	57.1	48.8	62.2	70.6	70.8
中2	61.6	50.4	65.2	71.2	75.9
中3	62.2	56.9	66.7	73.3	74.5

◆H25～29英語教育実施状況調査より

目的

- ・高校生の英語学習支援を大学(都留文科大学)と連携して行い、学生の教員養成と指導者の教員研修を目指す
- ・都留市の生徒たちの英語力養成CAN-DOリストをもとに「ゆるやかな接続」を継続し地域全体の英語力向上を目指す

取組の内容

○高大連携プロジェクト

- ①都留文科大学英語インターンシップ(JASTプログラム)の活動と連携
都留文科大学留学生7名が本校英語理数科の総合的な学習の時間に英会話および国際文化交流を行い、生徒の英語運用能力を伸ばす
- ②昨年度より引き続き生徒の英語運用力を延ばす授業内言語活動を都留文科大学の三浦幸子先生の指導のもと開発、実施、調査(大学生の授業参加と指導者[授業者]、大学教員との定期的打ち合わせ含)

○小中高大英語教員および大学生への英語教育セミナー開催

小中高大英語連携授業研究協力校教員に向けた研修会の実施
内容「新学習指導要領を踏まえた英語授業のあり方」(H30・2月)

○中学校英語授業参観

都留第一中、都留第二中、西桂中における中学校英語授業参観参加

○都留市英語力養成CAN-DOリストをもとにした出前授業

・旭小学校「国際理解集会」取り組みにおける都留興譲館高校の英語科教員による旭小学校への英語出前授業

成果①

- ◎高大連携を行った生徒の英語表現力、運用力、クリティカルシンキング能力の伸び→ 第13回全国高校生英語ディベート大会出場
第3回山梨県高校生英語ディベート大会第3位
- ◎生徒の英語運用力の伸びについて事前事後結果

質問紙調査(学習者認識)結果一部抜粋
(1(まったくあてはまらない)～7(いつもあてまはる))

都留文科大学英文学科 三浦幸子先生による質問紙調査結果

流暢性向上の方略使用	pre	post
英語を話すとき、発音に注意を払っている	3.853	4.647
自分の言っていることが相手に聞こえるように明瞭で十分な音量で話すようにしている	4.382	5.088
英語を話すとき、音の強弱とイントネーションに注意を払っている	3.647	4.353
会話の流れに注意を払っている	3.265	4.088

この結果以外にも、意味交渉方略使用について、「聞き手が理解するまで言いたいことを繰り返し言い換える」「相手の言っていることがわからないときは聞き返したりして理解できるようにする」などの項目で有意差がみられた。

成果②

◎小学校で「出前授業」を経験した児童生徒の変容

(教員から見た生徒の変容)

- ①積極的に英語に親しもうとする姿勢が育っている
- ②映像の助けもあり、児童が興味関心を持って言語活動に取り組んでいた
- ③誰かが英語で話しているときには注意を向け、しっかり(その英語を)聞いている
- ④国際理解集会を通して、その背景の文化への興味を示している

取り組みの様子

小学校での出前授業風景



Student Volunteerの授業参加風景



今後の課題・方向性

- ①高大連携プロジェクトにおいて
 - ・教員志望の学生が連携を通して授業支援に入りやすい環境作り(生徒同士がともに学び合う仕掛け)
 - ・他校種だけでなく、他教科との連携をしながら学び合い言語活動の高度化をはかる(特に英語ディベートの実施には社会科、理科等の連携が必須)
 - ・英語話者としてのモデルを身近な大学生が示すことは大いに有意義
- ②小中高連携をより一層効果的に行う
 - ・さらなる都留市の英語教育Can-Doリストの有効活用方法の研究
 - ・小中高大連携を効果的に行うための連絡・研修会の実施をさらに積極的に実施する

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・4技能のバランスのとれた英語力育成→CAN-DO活用による、4技能をバランス良く身につける指導計画と授業実践
- ・妥当性、信頼性の高い評価→目標・指導・評価の一体化による、指導力の向上

具体の取組の内容

- CAN-DOリストの年度毎の見直しと生徒との共有方法の改善
 - 定例教科会議における指導、評価についての綿密な打ち合わせの実施
- 年間指導計画へのパフォーマンス評価の計画的配置
 - シラバスへの反映と評価用ルーブリックの単元当初における提示
- 外部専門機関との連携による、授業研究会及び研究協議の実施
 - 研究授業及び「熟議」形式の研究協議の実施(外部専門機関から有識者を招聘)
- 外部検定試験の受験による生徒の英語力の確認
 - 外部検定試験の受験の推奨と、必要に応じた個別学習指導の実施



成果①

- 英語教員の授業改善
 - ・英語科教員の協働によるパフォーマンス課題の質が向上
 - ・評価用ルーブリックの妥当性・信頼性の向上

【生徒授業アンケートから】

質問:評価は納得できる。
回答:強くそう思う→51%
そう思う→49%

* 否定的な回答をした生徒は0%

成果②

- 外部検定試験の合格者数増加
- 【英検準2級合格者数】
 - ・平成25年度(事業実施前)→62名
 - ・平成30年度→71名
- 【英検2級合格者数】
 - ・平成25年度(事業実施前)→20名
 - ・平成30年度→62名
- * 平成30年度は第3回の試験実施前のデータ

今後の課題・方向性

【今後の課題】

- ①学校外で英語を活用する機会の少なさ
- ②言語の使用場面に応じた英語の使い分けの機会の少なさ
- ③CEFRとの相関を意識したCAN-DOが作成されていない

【方向性】

- ①学校行事を含め、英語を用いてコミュニケーションを図る機会を増加させる
- ②パフォーマンス課題の改善により言語の使用場面を多様に設定する
- ③CAN-DOを年度ごとに見直し続ける

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～山梨県立富士河口湖高校～

目的

- ・公教育の外から見た人材育成を参考に、今後の英語教育を多角的に考える。
- ・大学入試改革にともなう変化に対応するために、教員同士が情報を共有する。

取組の内容

アントレプレナーシップ(起(企)業家精神)を教育に取り入れる活動をしているタクトピア株式会社から講師を招き、ワークショップを取り入れた研修会を開催した。

- ①教育の歴史を振り返り、未来型の教育を考える。(500年前に寺子屋から始まった日本の教育は、これから100年後にはどうなっていくのか)
- ②少子高齢化、グローバル化、AIによるオートメーション化などが進む世の中で、積極的に社会に関わっていきこうとする子どもたちを育成する方法を考える。(「白熱キャンプ」のような原体験の機会を、普段の授業に落とし込んでいくためには)

取組の様子



※少規模ではありましたが、校内外の先生方に参加いただき、活発な意見交換もできました。

成果①

1人1台のICT機器が必要

これからの英語教育において、よりAuthenticな教材を扱ったりする上で、教員だけでなく生徒1人1人が授業内外でスマートフォンやタブレットなどを駆使して学習していくことが必要になる。LMS (Learning Management System)やMOOCs (Massive Open Online Courses)、Flipped ClassroomにはもはやICT機器は欠かせないのが現状である。

成果②

Meaningful Interactionを！

AIによる自動化で、もはや教室(学校)で学ぶ必要すらなくなるのでは？と言われる時代でも変わらず必要なこと＝Meaningful Interaction。親子間のやりとりのような、本当に意味のあるやりとりを英語の授業にも反映させていく必要がある。また、授業の中だけでは限界があるので、学校単位での理解・協力も必要。

今後の課題・方向性

- ・授業の改善(年間指導計画やCan-Doリストの見直し)
→具体的には成果②にあるように「意味のあるやりとり」を増やすように見直しをする。(DiscussionやDebateなどは実際に海外のテレビ番組などを使う。etc)
- ・外部検定へのより積極的な取組
→現在取り組んでいる英検、GTEC、他のIELTSなどを活用し、授業をよりAuthenticなものにしていく。(とはいえ、大学入試改革のことにもアンテナを高く張る)